

【報告1】

藤堂高虎と二人の正室久芳院と松寿院

谷 本 進（養父市教育委員会歴史文化財課）

1. はじめに

天正5年から天正9年にかけて但馬の城郭と羽柴秀吉と羽柴秀長等による但馬攻めについて、西尾孝昌氏は但馬の山城を現地調査して図化し、但馬地域の3市2町と連携して多くの調査報告書を発刊している¹。報告では一次史料に加えて、『公室年譜略』（安永3年1774）・『高山公実録』（嘉永3年～安政元年1850～1854）・『増補七美郡誌』（明治39年1906）・『校補但馬考』（大正11年1922）等を基に小代一揆等の動向を踏まえながら城郭の果たした歴史的な役割を検討している。天正9年10月の鳥取城主吉川経家の切腹まで、播磨国・但馬国・因幡国が織田信長方（羽柴秀長・羽柴秀吉）に対する毛利輝元方（吉川元春）との境目の戦争が展開した。また、天正9年の鳥取城攻めをめぐる研究は鳥取県の研究者等により一次史料に基づいた研究が進展している²。

天正9年7月には羽柴秀吉が自ら出陣して但馬北西部の反織田勢力の拠点である小代一揆が立て籠った城山城（兵庫県美方郡香美町小代区忠宮）を攻め、撫で切り生け捕り磔にした。藤堂高虎は天正5年から天正9年にかけて大屋加保村（兵庫県養父市大屋町加保）を拠点に小代一揆と戦った。鳥取城攻めに至る但馬の戦闘については一連の研究に譲り、学問的には注目されにくい藤堂高虎の正室の久芳院と継室となった松寿院の姻戚関係を紹介する。

藤堂高虎は、弘治2年（1556）近江国犬上郡甲良庄（現・滋賀県犬上郡甲良町）において誕生する。『寛政重修諸家譜』³等によると、15歳で浅井長政に仕えて姉川の合戦に初陣する。その後、織田信澄に仕えた後、天正4年（1576）21歳で羽柴秀長に300石で仕える。天正8年1月三木城合戦では加古六郎右衛門を打ち取った。但馬国の小代一では富安丹後を打ち取り、天正9年3,000石を加増される。天正11年4月

柴田勝家と戦った賤ヶ岳合戦の後には2,000石を加増され、天正13年の羽柴秀吉の紀州攻めに従軍した。その後、羽柴秀長から紀伊国粉河城主に任じられ1万石を与えられた。寛永7年（1630）10月5日75歳で卒し高山道堅寒松院と号し、津藩32万5千石の藩祖となった。室は長越前守連久が娘である。

2. 久芳院と垣屋越前守

『高山公実録』⁴によると藤堂高虎は、天正9年（1581）10月の鳥取城落城の後、主君の羽柴秀長から3,300石の領地を受け、館（陣屋）がある但馬国養父郡大屋の加保村で、加保城主の柝尾加賀守祐善の媒酌によって、但馬国美含郡中野村（兵庫県香美町香住区中野）の一色修理大夫義秀の娘と結婚した。この人が久芳院であり、慶長20年伊勢国津で逝去し四天王寺に葬られた。藤堂高虎は久芳院の縁によって、一色紀伊守秀勝の子である南禅寺の以心崇伝と入魂であったという。天正9年丹後国弓木城（京都府与謝野町岩滝）主である丹後守護一色氏の一族と思われるが関係を示す伝承はない。羽柴秀長の侍大将となった藤堂高虎が軍事力を持たない一色義秀の娘（久芳院）と姻戚関係を結ぶことになった背景には謎が多い。

三重大学歴史研究会が調査した『藤堂御家家譜并雑書』⁵には藤堂高虎の妻に関する記事がある。史料は家譜や家伝という性格を持つため取り扱いが難しいが、久芳院の母は仙石越前守の娘とされ、子孫は「中野村に大きな郷士有之、一色治部と申、只今ハ、出石城主仙石越前守殿大庄屋の頭役に治部、被申付候」とある。久芳院の母は仙石越前守の娘としながら、領主も仙石越前守とすることは不自然である。天正9年以前の但馬国で越前守を称する武将は垣屋越前守が知られるが仙石越前守は存在しないの

ことは但馬支配の安定化に有効である。さらに天正8年6月から天正9年11月の美含郡は宮部継潤の所領であった。久芳院は美含郡中野村に住んでいたことから、美含郡を支配した宮部継潤と垣屋豊統が介在した可能性は高い。史料的な裏付けはないが状況から久芳院の母は仙石越前守ではなく垣屋越前守と推定した。

3. 松寿院と宮部継潤

『寛政重修諸家譜』では藤堂高虎の正室は長越前守連久の娘(松寿院)であり、高虎と松寿院の間に生まれた高次・高重・女子(蒲生忠郷の室)の3人が記されるが、一方で久芳院の存在は表に出てこない(第3図)。そして松寿院は宮部継潤と結婚して、死別した後に高虎に再嫁したものである。

『藤堂御家家譜并雑書』では「松寿院殿御父ハ長越前守連久也、母ハ但馬国水尾城主垣屋駿河守平宗時か妹也、御兄を長織部と号、高虎公に仕て七千石を領す、藤堂監物元祖也」と書かれている。

長越前守連久は但馬国美含郡訓谷村の林甫城(兵庫県香美町香住区訓谷)主である。長氏の一族は貞享5年(1366)から応安5年(1370)まで但馬守護を務め、「長越前守」「長道全」「長伊豆入道」の人名が確認される。長氏は室町幕府の「奉公衆」であり但馬守護山名家の被官ではないとされる⁷。

松寿院の父である長越前守連久は、天正6年4月18日に水生古城(兵庫県豊岡市日高町上石)の戦いに出陣する。山鹿素行の『武家事紀』では、垣屋駿河守が三千の兵を率いて水尾に出て陣を張り、長某は垣屋駿河守豊統に属して七百余を率いて出陣し討ち死にしたが、垣屋は羽柴方の宵田城の城督伊藤与三右衛門を討ち果たして勝利したという⁸。

『藤堂御家譜并雑記』では松寿院の母を但馬国水尾城主垣屋駿河守平宗時の妹と記すが、宿南保氏の垣屋系図では垣屋駿河守宗時は轟城主であり、垣屋豊統の父にあたる。つまり、垣屋豊統は叔父である長越前守連久と水生古城の戦いを戦ったことから、但馬国水尾城主と伝承されたのであろう。

『校補但馬考』⁹では長越前守連久を長越前守高連

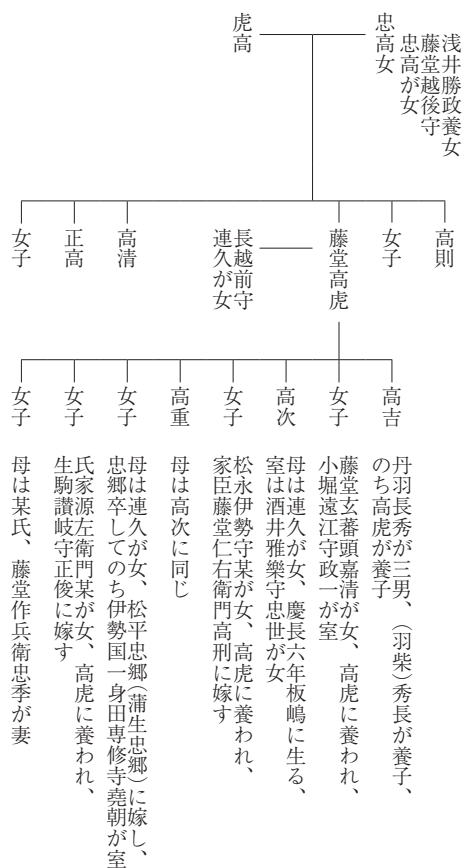
とし、垣屋駿河守に属して水生古城で戦い、後に山城国に赴くとする。『公室年譜略』¹⁰では連久は後に高連と改名したという。一次資料で長越前守は確認できないが『垣屋文書』¹¹では長弥次郎と垣屋兵部丞の名前が認められる。

天正8年6月垣屋豊統が宮部継潤の与力になることで、宮部継潤に松寿院が輿入れする機会が生じる。宮部継潤と松寿院の結婚は、但馬水軍を束ねる垣屋豊統を家臣に組み込むことになる。『高山公実録』では松樹院は永禄8年(1565)生まれ、宮部継潤は不明ながら一説には享禄元年(1528)という¹²。天正9年(1581)松樹院は16歳、継潤は53歳前後と考えると、松樹院は垣屋豊統の従妹として宮部継潤の側室に差し出されたことになる。

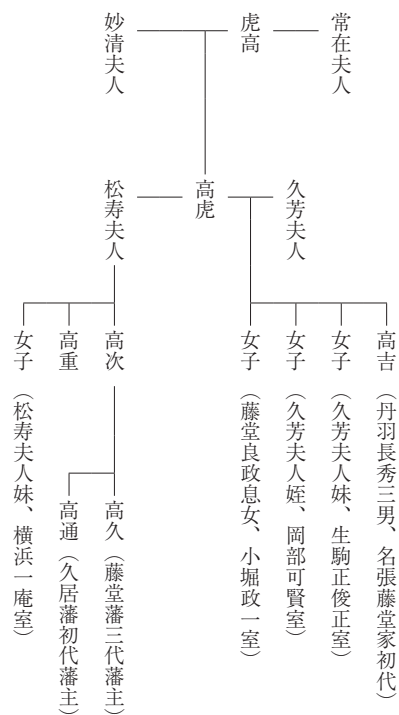
『垣屋文書』によると、天正8年6月8日、羽柴秀吉から宮部継潤に但馬国美含郡(豊岡市竹野町・香美町香住区)が与えられ、羽柴秀吉から垣屋豊統にはその内の2000石が与えられた。天正8年6月23日、宮部継潤は垣屋豊統に合力として1000石を与えている。時代は降るが但馬国天保郷帳によると但馬国美含郡は11,628石5斗9合であり、3000石が垣屋豊統で、8000石程度が宮部継潤の知行となる。垣屋豊統は秀吉の直臣として、宮部継潤の与力に付けられた。

垣屋豊統は天正8年5月まで毛利方の中核となる武将として活躍し、同年6月からは一転して但馬水軍を率いて羽柴秀吉に属して鳥取城攻めで活躍する。豊統の従妹にあたる松寿院が宮部継潤の側室となった背景は、宮部継潤が垣屋豊統の率いる但馬水軍を掌握するためであろう。さらに但馬国美含郡には長氏の林甫城と垣屋豊統の轟城があり、宮部継潤が長氏や垣屋氏と結び付くことは領地支配の上で有効であった。その一方で、垣屋光成は松寿院を通じて宮部継潤の一族となることで身分が安定した。

以上のような情勢からみて、天正9年から天正10年4月の備中高松城の戦いまでに宮部継潤と松寿院は結婚したのであろう。



第3図 『寛政重修諸家譜卷第九百』 藤原氏支流藤堂



第4図 『藤堂高虎関係系図』 藤田達生氏作成

4. 松寿院と藤堂高虎

慶長4年3月宮部継潤は逝去し、宮部継潤と死別した松寿院は慶長4年9月に藤堂高虎に再嫁する。この時に松寿院は藤堂家の大坂屋敷に入った。高虎は弘治2年(1556)生まれ、松寿院は永禄18年(1565)生まれで高虎が9歳年長となる。そして慶長6年9月11日板島城(愛媛県宇和島市和霊町)で松寿院から藤堂高次が生まれる。豊臣氏奉行人として豊臣政権を支えた宮部継潤の死から再嫁まで半年である。

『高山公実録』は久芳院に実子ができないため松樹院を娶ったとする。しかし、慶長3年8月に豊臣秀吉が死に、慶長4年1月には徳川家康と伊達政宗・加藤清正・福島正則・蜂須賀正勝との間で婚姻の約束が豊臣秀吉の遺命に背いて進められる。このような激動の時期に松寿院は藤堂高虎に再嫁する¹³。松寿院の再嫁は、宮部長熙(宮部継潤の養子)が藤堂高虎を通じて徳川家康へ誼を通じる人質にもなる。慶長5年9月の関が原の戦いで宮部長熙は徳川家康に属したが失策により捕らえられて南部藩に配流とな

った。

豊臣秀吉の死によって徳川家康への政権が移ることによって藤堂高虎の状況は変化する。藤田達生氏作成の「藤堂高虎関係略系図」(第4図)¹⁴をみると、久芳院は高吉の他に3人の女子を養子とする。藤堂高吉は羽柴秀長の養子から高虎の養子に入り、高虎の後継者であった。しかし慶長6年高次が生まれると後継者は高吉から高次へと変化し、松寿院は藩主の生母となった。

『藤堂御家譜并雜書』や『公室年譜略』は、松寿院の兄である長織部連房は前田利長に仕えていたが、慶長10年藤堂高虎に1,500石で招かれ、後に7,000石を領する藤堂監物となる。松寿院の弟の宮部木工は宮部継潤の養子であった。松寿院の願いにより藤堂高虎は1,000石を与えて宮部継潤の名跡を継がせている。長織部連房と同じ慶長10年前後に仕官したと考える。天正20年頃作成の『宮部家中書上』に垣屋駿河5,000石、宮部木工3,000石と記録される。垣屋統続も宮部木工も宮部継潤の重臣となっている。

5. おわりに

三重大学歴史研究会が平成20年に発刊した『ふひと別冊史料』に久芳院と松寿院の史料紹介が掲載され、『校補但馬考』では長越前守高連の二女が藤堂高虎の継室となって藤堂高次を産み後に松寿院と称したとある。『寛政重修諸家譜』には久芳院の記述がないが、藤堂高虎は大屋加保で枋尾祐善の媒酌によって久芳院と結婚したと伝わる¹⁵。『高山公実録』や『公室年譜略』をみながら謎が多い藤堂高虎と結婚した但馬出身の二人の正室を紹介した。

天正10年の宮部継潤と藤堂高虎が置かれた状況を考えると、宮部継潤と松樹院、藤堂高虎と久芳院は、天正9年の鳥取城攻めが終わった後に因幡国や但馬国の支配を安定させ、鳥取城から日本海を西に進み吉川元春や毛利輝元の首をとるために姻戚関係を結び家臣団を強化したと結論づける。

註

- 1 西尾孝昌氏の代表的な城郭調査報告書には次のものがある。『香美町の城郭集成』2015年3月 香美町教育委員会。『但馬国新温泉町の城郭集成』2017年3月 新温泉町教育委員会。『豊岡市の城郭集成Ⅰ』-竹野町・城崎町・旧豊岡市-2012年3月 豊岡市教育委員会。『豊岡市の城郭集成Ⅱ』-日高町・出石町・但東町-2013年3月 豊岡市教育委員会。『図説養父市城郭事典』2010年3月 養父市教育委員会
- 2 『織田VS毛利』-鳥取をめぐる攻防-鳥取県史ブックレット1 2007年6月 鳥取県。伊藤康晴編集『天正九年鳥取城をめぐる戦い』-毛利・織田戦争と戦国武将・吉川経家-2005年10月 鳥取市歴史博物館。『新鳥取県史』資料編、古代中世1古文書編下 2015年3月 鳥取県。中井均編『鳥取城』山陰名城叢書3 2022年3月 ハーベスト出版。高橋成計『毛利・織田戦争と城郭』2024年8月 ハーベスト出版
- 3 「寛政重修諸家譜第九百 藤原氏支流藤堂」『新訂寛政重修諸家譜』第十四 1965年8月 株式会社統群書類従完成会
- 4 『高山公実録』<藤堂高虎伝記>上巻、清文堂史料叢書第98刊 1988年4月 清文堂出版株式会社
- 5 「藤堂家譜并雑書」(補遺)、『ふひと別冊資料編』2008年1月 三重大学歴史研究会、58~59頁。

- 6 宿南保「第三節 山名氏の盛衰」『養父町史第1巻』1990年3月 兵庫県養父郡養父町、446頁~456。
- 7 西尾孝昌「林甫城(所在：香美町香住区訓谷字輪峯)」『香美町の城郭集成』2015年3月 香美町教育委員会。長氏の居城である林甫城は香美町香住区訓谷の佐津川の右岸、日本海を望む標高148.7mに位置する。城郭の規模は東西約71m、南北約300mを図り、集落との比高は約140mある。北西方向を望む尾根の先端部にある主郭は東西約20m、南北約41mあり、城内で最大の曲輪である。後方の尾根筋は堅堀・堀切を掘って遮断する。主郭の東斜面に堅堀を一本入れる。畝状堅堀群を持たない地味な山城である。山裾には長さ120m、幅10mから20mを測る居館跡が残る。
- 8 『武家事記』は『日高町史』上巻の引用。「秀吉播州をこえて、但馬征伐の時、山名老臣、垣屋駿河守、但馬に在国す、これによって、垣屋三千の兵を率し、水尾に出て陣を張る。先陣は長の某七百余、二陣に垣屋孫三郎に徳吉・安長という両家老が相加わる。(略)寄手は、伊藤与三右衛門三千ばかりにて押し寄せ、宮部はわすが五六百ばかりにて押し寄す。(略)垣屋先手長戦死す。伊藤つづいて相かかる。孫三郎が備え堅く守り、力戦して、伊藤ついで安長にうたれ、兵士悉く敗軍し、その日の戦はやみぬ。その後数回の対陣に、垣屋ついに秀吉の陣に降して、但馬平定す。世に水尾合戦という。但馬は美濃守秀長に賜る。宮部三万石を賜り、垣屋これが与力たり。」
- 9 桜井勉「長九郎左衛門」592~596頁、「長氏諸女」636~637頁、『校補但馬考』1922年7月 私立但馬連合教育会、昭和48年6月 株式会社臨川書店、復刻版
- 10 『公室年譜略』-藤堂藩初期史料-、清文堂史料叢書第109刊 2002年7月 清文堂出版株式会社
- 11 「垣屋文書、9宗光連署状・11羽柴秀吉知行宛行状・12宮部継潤知行宛行状」『兵庫県史』史料編、中世九古代補遺 1997年3月 兵庫県
- 12 阿部猛・西村恵子編集「宮部継潤」『戦国人名事典コンパクト版』1990年9月 新人物往来社
- 13 慶長4年の松寿院の藤堂高虎の再嫁は、宮部継潤の死後約半年という短期間であり、宮部長熙と藤堂高虎が合意した上での関係強化の証であろう。
- 14 藤田達生「序章藤堂高虎と初期藩政史研究」藤堂高虎関係略系図、6頁。『藤堂藩の研究』論考編 2009年3月 清文堂出版株式会社
- 15 才下正義「第4節 但馬における藤堂高虎」『図説養父市城郭事典』2010年3月 養父市教育委員会。西尾孝昌「第四節 秀吉の但馬平定と大屋」『大屋町史』通史編 2010年3月 養父市

〈史料〉

1、『藤堂御家譜并雜記(三)』

雜記

一、久芳院殿御墓勢陽四天王禪寺に有之、御墓料百石御寄附也、但し予州より引移し給ふ也、御父ハ一色氏、御母ハ仙石越前守御女也、

一、一色京大夫義有〔龍勝寺と号〕同修理大夫義直〔長源院殿と号〕同左京大夫義秀 女高虎公御内室也〔久芳院は枳尾加賀守申人也と云、〕

右一色家于今但馬国美含中野村に一色治部と云う者有之也、

一、松寿院殿御父ハ長越前守連久也、母ハ但馬国水尾城主垣屋駿河守平宗時か妹也、御兄を長織部と号、高虎公に仕て七千石を領す、藤堂監物元祖也、

一、松寿院殿御姉君南部二安法印室榮雲院と号、娘あり、半井右衛門佐從五位下利親の室と成、息半井驢庵瑞寿の母也、

一、松寿院殿御妹、熊野新宮堀内右衛門室、同左近・藤大夫・助之進三人之母也、

一、松寿院殿御弟、宮部左高虎公に仕て千石を領す、善祥坊名跡也、但し松寿院殿御願、宮部之為奉祀と云、

一、松寿院殿御入興之節、長家之一家を長次郎右衛門付添可參答之處、次郎右衛門申し候ハ、嫡子統二へ随侍可仕身として、今宜しき事有之候共、息女御供仕、他家へ不可参とて不行、二家郎橋本弥助付来る、是故藤堂造酒丞・同兵左衛門祖也、次郎右衛門か子孫今に藤堂監物家に有也、

2、高山公実録卷之二

此歳公一色修理大夫の女を娶り給ふ後久芳夫人と申奉るハ是御事なり〔枳尾右門家乗〕御縁組も源左衛門〔枳尾善次原註〕

御取持申上但馬美含郡中野の一色修理大夫殿の御息女様御迎被遊加賀守屋敷にて御婚禮御調被遊因州備中へ御越の刻御奥様ハ加賀守へ御預け置被成候よし白雲様も三年余被成御座候由

〔秘覚集〕御奥様枳尾善次中人仕但馬国美含郡中野村一色修理大夫義直卿の御息女を御むかへ加賀守宅にて御婚禮御調西国筋御出陣の中ハ加賀守預り居中候て紀州古川へ送り申候由伊予へ御国替伊勢へ御国替までも御機嫌能被成御座梶田久左衛門祖母なと相勤居申たる由久左衛門咄承之慶長廿乙卯年八月廿日に津にて御逝去四天王寺へ葬る久芳院殿桂月貞昌大禪定尼依之四天王寺に二十人扶持附大通院様御代に知行百石被成下候由但馬国加保山法花寺目蓮宗此寺三百六十七年に成古跡代代常紫衣上人住職す枳尾家の菩提寺にて身延直末の処今ハ京妙伝寺預り末寺なり于今不相替田舎珍敷能寺なり古き過去帳に左の通

七月九日 年号不見

一色左京大夫殿竜勝寺義有朝臣

十九日 年号月不見

一色修理大夫殿義直朝臣長源院殿

五月廿九日 年号不見

一色左京大夫殿義秀朝臣

右の通記有之中野村よりハ此寺十里計りも有之故久芳院殿暫く加賀守宅に被成御座候中御先祖の戒名を過去帳に御記置寺詣なと被成候事哉或時南禪寺捻録金地院の宗達長老御申候ハ大坂陣の砌当山伝長老と高虎公人魂有之子細存候哉との儀故其段不存候由申候得ハ高虎公の御簾中ハ一色家にて一色右京大夫と申撰州八尾に居申伝長老兄弟此右京一色修理大夫と高虎公ハ近き縁者故別魂に有之候と御物語にて承之右の達長老は木下肥後守殿御舍弟なり一色左京大夫殿は京都將軍時代ハ大名と相見え山名宗全方にて度度一色家の事記有之後家潰れ浪々と成中

野村に住居候歟于今修理大夫殿末孫の由中野村に大きな郷土有之一色治部と申只今ハ出石城主仙石越前守殿大庄屋の頭役に治部被申付候由右ハ柄尾易三書記の写なり

〔謹按〕久芳夫人の御事を一色修理大夫義直の女と云るハ時代違へり義直ハ応仁記等に見え尊卑分脈に義範の子とす夫人の御父祖子孫にて先祖の称号に依て修理大夫を襲称し実名ハしれざりしに過去帳に修理大夫義直とあるを見て先祖のことたるをしらす御父の名としたるなるへしさて宗国史外家伝にハ夫人を左京大夫義秀の女とす何に拠ることをしらす混雑録にハ左京之進とのみあり又編年集成に慶長三乙亥年八月越前一揆平均せしかハ信長彼国を一円に柴田修理に給ふ丹後の国を一色左京大夫義定安堵すへしとありこの左京大夫義定といふ人夫と年代相及へり若ハ御父兄にてもあらんかされとも数百年の後より然否を定めかたければしはらく録して参考に備ふ

3、高山公実録卷之八

（慶長四年九月）

同き月に長越前守高連の女を娶り夫人となす後松寿夫人と申奉るはこの御事なり

〔平尾留書〕高山様奥方様ハ松寿様と申候よし後年御本室に被為成候御法名ハ直に松寿院様と申候江戸本郷真光寺に御石碑有之候

〔創業遺事〕松寿院様御家へ人興慶長四乙亥年九月の頃歟松寿院様御童名おさいくま様と申候

〔宗国史〕公娶二長氏一松寿夫人是也久芳夫人無レ子又得二心疾一於レ是娶二故但馬佐須城主高連〔越前守原註〕女一為二外夫人一在二大阪邸一

〔伊東弥三右衛門覚書〕元禄十六癸未年祖父弥三右衛門へ大亨院様牧垣金石衛門以檜林新之丞と申者存知候哉と被遊御尋候祖父御請申上候ハ

新之丞と申者存知不申候檜林氏へ同苗の者養子罷越候処因御座候由申上候又金石衛門以被仰出候ハ新之丞と申者於京都町人に罷成新之丞妻ハ松寿院様御從弟にて其由緒故十二年松寿院様を御かくまひ申上候檜林家の紋ハ三柏にて有之候覚書仕置可申由被仰出候祖父又御請申上候ハ於但州宮部善祥坊没落の節先祖伊東修理之進と申者方に松寿院様暫被成御座候依之藤堂四郎左衛門先祖橋本弥助取持親類分に仕御願申上曾祖父弥三右衛門御家へ被召出候由伝承申候段申上候以上

〔造酒丞家乗〕元祖橋本弥助夫婦共但馬以來松寿院様へ御由緒有之付て関か原御陣前の年慶長四亥年高山様大阪中島御屋敷へ松寿院様被為入候以後弥助儀被召出其後御知行式百石被下置候役儀又ハ御取次の儀不承伝候

〔謹按〕異本長谷部系譜に松寿夫人の御事を載せていふ初ハ因州鳥取の城主宮部善祥坊に嫁せしか善祥坊高野山にて生害の後〔慶長軍記并友田左近右衛門戦功略に善祥坊卒去の由載せたれと高野にて生害の事見へす宗国史外家伝に文禄中云々とあり太閤記編年集成に秀次反逆の聞へありしかハ太閤善祥坊等に命して秀次を迎へ来らしめし事いへり其他世史多くハ善祥坊の事を漏らす且因州鳥取の城没落のことハ善祥坊の子兵部の世にして明年関か原の時なり善祥坊の事いまた詳かならず〕公へ再嫁の由載たり宗国史外家伝に夫人初配二宮部君一文禄中関白秀次敗辞連二宮部君一太閤使三吏打二其罪一宮部君将レ死離レ婚返二父之家一慶長四年己亥歳九月公聘レ之為二外夫人一とあり且伊藤覚書によれば此説いわれなきにもあらずしかれとも監物旧記にも見へさる事なれハ暫く後の考えを待のみ

同十月十八日白雲公板島の邸に逝去し給ふ〔事ハ前に詳なれハ引書ハ略す〕此歳大府より内匠正高へ下総国三千石を給ふ〔事は前に詳なれハ引書ハ略す〕又公旧主大和侯の旧恩を思ひ郡山の大光院を京都の大徳寺中に移し祀を奉し給ふ神君其義挙をよみして別に賜ものあり

4、『公室年譜略』巻第十九

慶長六辛丑年 閏十一月小

公ハ 高山公ハ嫡子母君ハ長氏松樹院尼公ナリ或説ニ摂州大坂中嶋ノ邸中ニ於テ誕生シ玉フト云ハ非ナリ、去年「慶長五年」高山公休暇帰藩ノ節夫人妊身タルニ依リテ与州板嶋ニ移シ玉フト云、是ニ依テ宗国志ニモ大坂ノ 公館ニ生レ玉フヤウニ載ス

私ニ曰ク 松樹院殿ハ長氏ナリ、長谷部長兵衛連信〔高倉ノ宮ノ青侍寿永中源頼政卿乱戦ノ時功アリテ世人勇名ヲ知ル〕ノ拾七世ノ後胤、但馬国ノ住人、長越前守連久ノ女ナリ、永禄八年丑年但州ニ誕生シ玉ヒ、容顔美麗世ニ知ラレ始メ、宮部善祥坊〔但内州ノ国主ニ拾四万石〕ニ嫁シタリシガ、善祥坊逝去ノ後 高山公ニ再縁シ、慶長四卯年入興シ玉フ、俗名ヲ才然ト唱ヘ奉ル

慶長十乙巳年正月大

此年 長織部連房ハ加賀黄門利長卿ニ客タリシカ 母君松樹院ノ内縁タルニ依テ 父公是ヲ加賀侯ニ告ケテ横田藤右衛門ヲ以テ利長卿ノ執役マテ是ヲ乞フ加候、応諾アリテ 当家ヘ招キ出シ玉ヒ、七千五百石ノ秩禄ヲ賜ヒ 公ノ傳臣トシ玉フト云々

私ニ曰連房カ祖先ハ高倉ノ宮勇臣長谷部左兵衛尉信連ヨリ拾八代

〔異十七代〕ノ後胤但馬国毎南垣ノ城主長越前守連久〔後改高連〕カ子ナリ 公ノ母君松樹院殿ノ実弟ナリ、能登国ニ世々強家タル長九郎左衛門方同根タリ、長九郎左衛門ハ加州利長卿ニ属シ長臣ノ列ナリ、故ニ是ニ因テ連房ハ加州ニ客タリ

5、『校補但馬考』桜井勉

〔補〕長氏諸女

〔補〕長越前守高連は、美含郡訓谷村林甫の城主なり、二男六女あり、

「長男織部連房、初豊臣秀吉の近習となり、又前田利家の客となり、後藤堂高虎に仕ふ、二男木工勝連、宮部善祥坊の猶子となる、後又藤堂高虎に仕ふ」 長女は、其夫婿を審にせずといへとも、二女以下皆有名の人士に嫁り、蓋其人皆婦容婦徳ありしならん、今伊勢長氏「織部の後なり、世藤堂監物と稱し、津藩の老臣たり、維新以後本姓に復し、長氏といふ」の系圖によりて之を録す、

長女 夫婿詳ならず、二女を産む、長女は大和大納言秀長の執事横濱一庵法印に嫁し、次女は典薬頭従五位下半井右衛門佐正氏に嫁す、

二女 津城主藤堂和泉守高虎の繼室となり、大學頭高次を産む、卒して松寿院と諡す、

三女 因幡守護山名中務少輔の室となる、「豊国の事蹟前に見ゆ」、「嗣子平右衛門豊政は、豈に其の産める所なるか、「三女の事蹟は前に見ゆ」

四女 伊達政宗の老臣白石城主片倉小十郎の室となる、「仙臺史傳、仙臺君臣略傳を按するに、片倉氏父を景綱といひ、子を景繼といふ、皆小十郎と稱す、年代に就て之を推すに、蓋景繼ならん、」

五女 紀州新宮堀内小次郎の室となる、

六女 京都佛光寺上人の室となる、

按するに、美含中野村に長氏あり、その家に傳ふる所の系圖は、高連を氏政に作りて曰く、氏政二子二女あり、長子美濃守信貞といふ、天正七年十月二十日卒す、「羽柴秀吉但馬を取るの前年なり」二子彌次郎後勘兵衛といふ、豊臣秀吉に仕へ馬廻たり、三千石を領す、「伊勢長氏系圖の織部なるか」二女あり、一人は宮部氏に遣し、「宮部氏其名詳ならず、伊勢長氏の系圖に高連の二男木工の宮部善祥坊の猶子となれることを記す、豈それ善祥坊か」一人は、大和國に遣わす、「夫婿の姓名詳ならず、伊勢長氏の系圖に高連長女の子を大和大納言秀長の執事

横濱一庵法印に嫁すと云ふ、豈その訛傳なるか」信貞二男一女を産む、女子名を於才熊といふ、「當時の女名、阿庵物語の阿庵、阿菊物語の阿菊、岩潤夜和の阿安牟、雨夜灯の花の類を普通とす、甲斐武田の支族に理慶といふ女子あり、されとも、女僧にれは怪むに足らず、普通の女子にて、才熊と稱するはいとめつらし、蓋於才熊は於熊を誤れるものならん、」養父郡大屋谷加保村栃尾源左衛門善次の媒にて、羽柴美濃守長秀の家臣藤堂與右衛門に遣わすと、記する所本文と同じからず、記して参考に供す、然れとも、山名豊國の長氏の息女を迎へしことは陰徳太平記にも出たれば、伊勢長氏系圖の記する所、蓋確實ならん、

6、『兵庫県史料編』中世9古代補遺「垣屋文書」

九 宗光等連署書状

長弥次郎殿下城事、尤神妙思召之由、被対父子三人、御書頂戴仕候、為御披見進之候、然者彼身躰、向後不可有御別儀候間、可然候、自然不慮之儀、於在之者、両三人、其方申談之、得 公儀御意、不可捨置之候、八幡照覧候、虚言有間敷候、恐々謹言

(永禄四年カ)

閏三月十四日

常朝(花押)

秀親(花押)

宗光(花押)

(豊保)

垣屋兵部丞殿

御宿所

*『校補但馬考』593頁には「長弥次郎又越前守と稱して林甫の城主となる」とあり、長弥次郎は長越前守連久を示す。

一一 羽柴秀吉知行宛行状(折紙)

美組之郡の義、宮部善浄房二遣候、其内本知行を以、式千石進之候間、可有知行候、但州之内者、いつれへも不遣候へ共、其方之義者、可被立役身上候間、如此候、善浄被属一手、諸事無由断儀、簡用二候、猶向後之義、不可有疎意候、恐々謹言、

(天正八年)

六月八日

羽柴

(豊統)

秀吉(花押)

垣屋駿河守殿

御宿所

一二 宮部継潤知行宛行状(折紙)

御知行方之儀、秀吉被進之外二千石分、為私合力進之候、所柄之事ハ追而可申談之条、全可預御領知候、向後儀、弥不可有疎意候、猶垣土佐右可申候、恐々謹言

(継潤)

天正八年

宮部善浄房(花押)

六月廿三日

垣屋駿河守殿

御宿所